



TITLE:

<書評>中村 平著『植民暴力の記憶  
と日本人 --台湾高地先住民と脱植  
民の運動』大阪大学出版会、  
2018年、定価5,000円+税、246頁

AUTHOR(S):

松岡, 格

---

CITATION:

松岡, 格. <書評>中村 平著『植民暴力の記憶と日本人 --台湾高地先住民と脱植民の運動』  
大阪大学出版会、2018年、定価5,000円+税、246頁. コンタクト・ゾーン 2019, 11(2019):  
475-479

ISSUE DATE:

2019-08-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/244000>

RIGHT:

中村 平著

# 『植民暴力の記憶と日本人 ——台湾高地先住民と脱植民の運動』

大阪大学出版会、2018 年、定価 5,000 円＋税、246 頁

松岡 格\*

## 1 本書の構成と概要

1990 年代から台湾の先住民、台湾原住民<sup>1</sup> タイヤル族の居住地域への訪問、調査を行ってきた中村平氏による研究成果をまとめた学術書である。本書はフィールドワークの内容をまとめた民族誌の性格も備えている。

まずは下記のような構成の本書の内容について、その概要を紹介する。

序

- 第 1 章 脱植民化の課題と植民暴力の記憶、植民地責任
- 第 2 章 植民暴力の常態化としての「和解——「帰順」をめぐる日本とタイヤルの解釈
- 第 3 章 ムルファーから頭目へ——呼びかけられる天皇と日本
- 第 4 章 植民暴力の記憶と日本人の責任
- 第 5 章 「理蕃」の認識論——植民化・資本主義的近代化と植民暴力
- 終 章 脱植民の運動

著者は第 1 章においてまず、「民族自治」などのトピックについての原住民自身の発言・著述から、脱植民地化に向かう動きを読み取っている。また原住民文学に刻まれた原住民の悩みから、植民地化が深く進行した精神的な苦境を読み取り、彼らの脱植民地化が、そうした苦境からの出発を余儀なくされていることが示唆される。

続いて著者は、こうした「脱植民地化」の課題が元植民地で完結する問題ではないことに注意を喚起する。著者は太田好信の議論に依拠しつつ、こうした「脱植民地化」が植民者と被植民者の関係性の作り直しを含むことを示唆する。つまり脱植民地化という課題

\*MATSUOKA Tadasu 獨協大学

1 台湾では「先住民（族）」という言い方はネガティブな意味を含むため「原住民（族）」という言い方が採用されており、日本の研究者の多くもその言い方を尊重して台湾の先住民について「原住民」あるいは「原住民族」という名称を用いている。

が、元植民者の末裔である日本人も引き受けなければならないものであることに読者の意識を向けようとする。著者は上記のような台湾および台湾原住民のあげる声に応えるべき日本人の応答責任を指摘しているのである。

ここに至って本書自体が脱植民地化の運動の一環であることが示される。つまり読者は本書を読んで、タイヤル族をはじめとした台湾原住民の脱植民地に向けた動きについての情報を共有することで、脱植民地化にむけたプロセスを分有することが期待されているのである。そこで日本人に分有が期待されているのが例えば暴力の記憶の見直しであり、その中で読者には「自分とは何であるのか」という問いを抱えつつ行為遂行的（パフォーマティブ）に記述・実践を行う「困難な私たち」として脱植民地化に参加することを求められているのである。

第2章でまず言及されるのは、タイヤル族による「糾弾しない語り」である。著者がタイヤル族の部落を訪問し、現地の人々に話を聞く中では、過去に日本が台湾に対して植民地統治をしていたにも関わらずタイヤル族の人から「感謝」が表明されることさえある。

それに対して著者はタイヤル族の語る「平和」に至る過程の背後にも、植民地主義がもたらす暴力が存在していたはずであることに思いをいたす。大日本帝国は台湾原住民居住地域に対する統治を行っていくに当たって武力討伐を行った。その討伐はタイヤル族居住地域にも及び、武力抗争に敗れたタイヤル族は植民地政府に対して「帰順」する。この「帰順」とは政府から考えれば統治下に入り、その地域の土地と人が植民地政府の統治体系に組み込まれるという、不可逆に見えるプロセスを意味する。

それに対して著者はイバン・ノカン<sup>2</sup>の著作の「帰順とは和解に過ぎない」という記述に注目する。ここにおいて示されるのは、タイヤル族のタイヤル語の「スブラック（和解する）」ということばが多義化（対等で一時的な和解を意味する伝統的な意味と、一方的で不可逆とも思えるような和解の意味）していったことである。

第3章ではタイヤル族による「天皇は日本のムルファー」という発言の解釈が問題となる。この発言を聞いた著者は違和感を持ち、遡行的にこの発言の意味について調べ、分析して次のような結論へと導かれた。

「ムルファー」というタイヤル族のリーダーは人類学のビッグ・マン概念になぞらえて説明される。つまりチーフ（首長）のように世襲のような形で権力を前任者から引き継ぐのではなく、自分の実力でその地位を獲得するようなリーダーである。日本による植民地統治が始まると、ある種の間接統治を担う存在として「頭目」という地位が作られ、やがてこうした植民地統治を補佐するような地位が現地社会で力を持つようになる。したがって原義において「ムルファー」（現地で選ばれた、固定化しないリーダー）と「頭目」（国家権力が背後にある固定化するリーダー）は異なっているが、植民地状況において「頭目」もムルファーの一種として認識され、ムルファーの意味が拡大した。「天皇は日本のムルファー」の「ムルファー」はこの変化した後の意味であり、その発言の背後には日本統治時代以降の原住民社会の変化が存在していたのである。

---

2 台湾において1980年代に始まった先住民族運動（原住民族）のリーダー。

第4章で論じられるのは、これまでの章でも触れられていた日本人による応答責任である。著者はタイヤル族の著作の内容をまとめ、聞き取りを行う中で植民地主義やそれに關わる暴力についての記憶に触れてきた。その中で著者は民族自治を希求するタイヤル民族議会のマサ・トフイによる父トフイ・ホラについての語りに触れ、民族自治を目指す衝動と植民地状況における暴力の記憶が強く結びついていることを見いだす。

こうした暴力の記憶の問題について、台湾の漢人研究者が聞き取ったタイヤル族の暴力の記憶と日本人への辛辣な評価と、いわゆる親日的な「聞きたい声」のみを拾う日本人の団体の原住民との交流のあり方が対比的に示される。

現地声をこのようにとりあげる見方について批判的に検討することを通して著者が到達するのは、原住民の声を日本人の誇りを回復させるものとして切り取って暴力の記憶を聞き漏らすのでもなく、反植民地主義の動きとして切り取って近代化に努力してきた人々の思いを否定するのでもなく、彼ら自身の声に耳を澄ませることである（そこで紹介されるのが、単純な解釈に還元できないタイヤル族の夫婦に対する聞き書きの記録である）。第5章で俎上に上がるのが、日本統治時代「理蕃」と呼ばれた、植民地政府が原住民に対して行った統治の性格である。ギャヴィン・ウォーカーの議論を引きながら、植民地成立の条件としての植民地主義的差異の認識の重要性を指摘した上で、著者は中村勝著『捕囚』を引きながら、「理蕃」の核心には日本資本主義の特徴とされている「半封建性」、前近代性があったと指摘する。具体的に示されるのは賦役労働を押しつけながら原住民を国家に取り込もうという動きであり、これに対して当時武力抵抗のリーダーが担った対抗する姿勢である。そして著者はこのような「理蕃」の歴史を読者と共有することで脱植民地化という植民地主義を介した関係性の解消、真の「和解」へと一歩を進めようとしている。

## 2 本書の意義と脱植民地化をめぐる問題

以上のような著者の見解・主張は明確だと思われる。著者の長年行ってきたフィールドワークの成果として正当な評価が与えられるべきである。特に著者が記録・紹介したタイヤル族の人々の声を日本の多くの読者の目の触れる形にすることは価値がある。こうした声に日本に暮らす我々はどう応えるべきなのか、確かに考えるべき問題である。特に、著者の聞き取った暴力の記憶のようなものが、学術的言説の中において埋もれてしまっているのであれば、なおさらである。

一方で本書が掲げる「脱植民地化」の内容については、著者とともに慎重に検討していかなくてはならないだろう。これと關わるのが、「植民地」「植民地主義」「脱植民地化」といった用語をどのように定義・解釈していくのかという問題である。その如何は研究者が何をどの程度まで引き受けて議論するのかということに關わってくる。

まず台湾が「植民地」であったのは戦前（日本統治時代）のことであり、特に日本との関係において、比喩的な用法以外で現在の台湾について「植民地」ということばを用いる意味があるとは思えない。

では「植民地主義」はどうか。これが植民地統治下で形成される不平等、非対称的な支配構造や差別・区別などを指すとしたら、これも直接的な意味においては、すでに台湾について当てはまらない。しかし、植民地統治終了後も旧植民地（台湾）に残る影響などについて語ることは意味があるだろう。

また時代状況は異なるものの、植民地統治下と比較できるような、差別的な社会構造が存在する場合、それを「植民地主義」と呼ぶことは意味を成すであろう。本書でも触れられている「内部植民地主義（または国内植民地主義）」における「植民地主義」はそのような意味である。同じ「植民地主義」ということばが入っていても、上記の諸例が指し示している事実・現象は異なっていることに注意する必要がある。

では「脱植民地化」とはどこからの脱却を目指しているのか。台湾において制度的な意味における植民地統治は終了している。したがって台湾における「非植民地化」は終了している<sup>3</sup>。しかし植民地統治が台湾に残した影響、遺産などは実在している。そうした植民地の、特に負の影響からの脱却を目指す脱植民地化の前進は簡単ではない。著者の言うように植民地主義的な認識・思考が原住民自身の意識にも染みついている（かつそこからの脱却を目指す発言などが抑圧されている）のであれば、脱植民地化は容易に解決できない、息の長い努力が必要な課題である<sup>4</sup>。

しかし、それでもまだ問題が残ることは指摘しておかなければならない。脱植民地化が必要なことは共有したとして、何をどこまですれば脱植民地化が進んだ、あるいは場合によっては完成したことになるのだろうか。タイヤル族と日本人の関係の作り直しは一体どのようにすれば正しいものになるのだろうか。こういった点についての本書の説明・議論はまだ十分とは言えない。

その関係性の作り直しに向けては、ある種のどっちつかずの姿勢こそがむしろ重要となるのではないだろうか。概要説明で触れたように、本書第4章の論述において、著者は現地の声を研究者の主義・主張に引き寄せて語ろうとする、あるいは安易にその声を代弁しようとするような姿勢を戒めている。現地の声に耳を澄ませることは人類学者にとって基本の姿勢と言える。しかしその基本の実践が難しいということは、逆に人類学者であればよく知っていることであろう。また本書は、台湾という、日本人にとって特別なフィールドでそのことを実現することの難しさを物語っている。確かに近年日本で出版される台湾や台湾原住民に関わる学術書（やそれに類する著作）にも上記の基本がふまえられていないものが散見される。著者のことばを借りれば「困難な私たち」の困難さの罅にはまる人

3 現在の台湾について内部植民地状況のような現象を認定して、そこからの脱却を図るということにはもちろん意味があるが、しかしそれをここで言う非植民地化と混同するべきではない。

4 本書の題名や目次で示されているように、著者はコロニアリズムの訳として「植民地主義」にかえて「植民主義」、デコロニアリゼーションの訳として「脱植民地化」にかえて「脱植民化」を用いることを提唱する。そのような用語法を用いる著者の意図は理解できる。つまり脱植民地化の運動を旧植民地の台湾の人々に押しつけず、旧植民者の末裔である日本人も引き受けていくべきという主張がその背後にある。これは正当な主張であろう。上述のように、研究者もまたそうした脱植民地化の運動に参加し、引き受けていくべきであるという主張も理解できる。しかし、「脱植民」「植民主義」と「地」を抜く意味がどれほどあるのか、依然として十分な議論が示されたとは言いがたい。そのような主張は従来通り「脱植民地化」や「植民地主義」という表現を用いても展開できたのではないだろうか。

が続出していると言ってもよいかもしれない。それに対して本書において伝えられる、そのような日本人にとって困難なフィールドで、人類学的方法論をふまえて台湾原住民との関係の作り直し、という課題に真摯に向き合い、格闘する著者の姿は貴重でさえある。台湾や台湾原住民について知見を得ようという方には是非一読してほしい力作である。